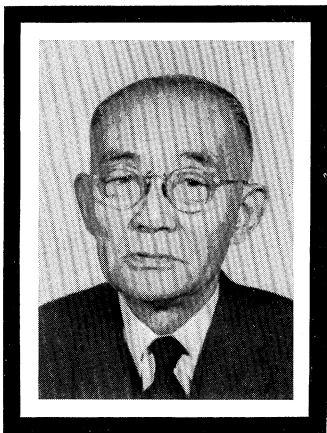


## 故 名誉会員 第38代会長 三浦義男君をしのぶ



宮城県知事三浦義男君は昨年第2回渡米知事団一行に加わり、4月20日羽田空港を出発アメリカ、ブラジル、アルゼンチン等を歴遊して5月20日帰朝、長途旅行の激務のため健康を害し、6月10日東北大学付属病院に入院胆石の手術を終って9月末退院されました。その後健康を回復するに至らず、12月29日再び入院専心療養に努められたがその効なく、肉親はもとより180万県民の再起の祈願も空しく2月8日午後9時48分終に70才で不帰の客となりました。誠に痛恨哀惜の極みであります。

三浦君は明治28年1月6日宮城県古川市に生れ、旧制第二高等学校を経て大正9年7月東京帝国大学工学部土木工学科を卒業して鉄道省に奉職し、監督局技術課勤務、大正15年9月千葉改良事務所主任技師となり、総武線線路増設、改良工事などを担当し、昭和3年6月静岡保線事務所長となる。昭和5年11月在外研究員を命ぜられアメリカ、ドイツに留学して7年8月帰朝、新潟鉄道局工務部長、工務局改良課長、同計画課長等を歴任、戦時中は工務局長、施設局長として関門海底隧道の完成に貢献し、その他幹線

の線路増設、輸送設備の増強整備等に努力を傾注して戦時輸送を全うしたことは誠に大きな功績でありました。国鉄在職25年間、終始一貫誠心誠意熱意を以って職責を尽し、また非常に人情に厚く、彼ほど先輩に愛され部下に慕われ同僚から頼りにされた人は無かったと思います。

20年8月終戦とともに運輸省退官、内閣技官戦災復興院勤務、特別調達庁監事等に就任して明敏緻密なる頭脳、卓抜なる識見、豊富なる経験を以って祖国復興のために尽し、復興建設技術協会副会長、交通協力会会長、土木学会会長等の要職に推され、科学技術の振興、国土開発等のためにも縦横無尽の手腕を発揮したことは、われわれ同窓の大いなる誇りでありました。

昭和28年参議院議員選挙に立候補せられたとき、私は東北地区総責任者となりともに苦しみともに喜んだ思い出、また、昭和34年宮城県知事選挙戦の数々の心労辛苦は私の胸から消えざりません。5代目の民選知事として在任6カ年間地域経済成長計画を全国に先きかけてつくり、県の財政を建て直して財政再建団体の汚名をいち早く返上し、仙台湾地区新産都市の指定獲得には官民の先頭に立って活躍し、指定後は仙塩合併など受け入れ態勢の整備に情熱を傾注し、また東北7県自治協議会会長として東奔西走、東北開発推進にも牽引車の役目を果たしたのであります。

三浦君は世のためには、自分をすて己れを犠牲にして努力する強い責任感と悪を憎み正しいことは飽くまで貫き通す強い闘志を持った人であり、県のため東北のため精力的に活躍し県民のための施策を着々と実現したことは、このまれに見る不撓不屈の精神力によるものであります。

新年祝賀会式場に不治の病であることを知らず病軀を押して不意に現われ「今年は実行の年」と元気に祝賀の言葉を述べたときは、参加者一同本当に深い感銘に打たれたのであります。1月3日病院に見舞ったとき春になったら渡米みやげのクラブの使いぞめをしたいと楽しんでいたことも実現せず情熱を傾注して計画した畢生の大事業である新産都市建設の途上に倒れたことは本当に心残りだったことと思います。実行段階に入りいよいよ彼の手腕に待つ所誠に大なるとき、幽明所を異にし再び温容に接することができなくなったことは、誠に痛恨のきわみであり哀悼の情に堪えません。2月13日彼が建設したスポーツセンターで佐藤総理大臣をはじめ各国務大臣その他知名の方々より贈られた数百の供花に囲まれて、しめやかに盛大に県葬が執り行なわれ、場内に溢れる6000余人の参列者一同はその遺徳をしのび、偉大な功績を称えて別れを心から惜しんだのであります。ここに謹んで冥福を祈り追悼の詞と致します。

(正会員 東北支部顧問 宮本 保・記)

### 盛大なる県民葬

